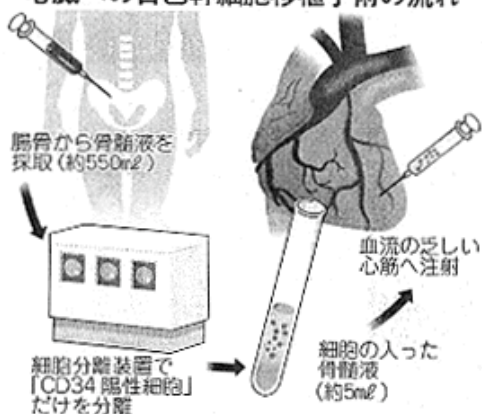


心臓への自己幹細胞移植手術の流れ



骨髓液から分離 注射で移植 幹細胞で心臓血管再生

国内で2施設目 信大病院が手術成功

信大病院(松本市)は十二日、重症虚血性心疾患でバイパス手術が困難な県内在住の男性患者(61)の心臓に、本人の骨髓液から採取した幹細胞を移植する手術を施し、毛細血管の再生、血流の回復に成功したと発表した。従来の治療は、開胸手術をして患部にレーザーを当てると、患者の体に負担が大きかった。同病院によると、同様の手術は国内で金沢大病院に続いて二施設目。

手術を担当した信大病院先端心臓血管病センターの池田孝一教授、心臓血管外科の天野純教授、輸血部の下平滋隆講師が

勝山努院長と共に同病院で記者会見した。池田教授らの説明によると、糖尿病が原因で狭心症になった男性を、九月十二日に退院したとい

月一日に手術した。男性の心臓は、表面に三つある冠動脈(血管)がいずれも詰まった状態で、このうち二つは従来のバイパス手術を実施。最も深刻でバイパス手術ができない一つについて、幹細胞移植をした。

男性の骨盤に近い腸骨から骨髓液を採取。移植による副作用を防ぐために、この骨髓液から細胞分離装置を使って血管を作る細胞「CD34陽性細胞」だけを高純度に分離した。これを、詰まった冠動脈周辺の血流の乏しい心筋に五ミリ、注射で移植した。

移植した個所に毛細血管が徐々にでき、血液が流れて、男性の症状は改善。副作用もなく、十月二日に退院したとい

る装置を導入して安全性は画期的」と強調した。二例目までバイパス手術と併用し、三例目以降は移植手術だけのほか、開胸せずにカテーテル(細管)で移植する方法も検討する。

信大病院はこれまで、手や足などで十七例の幹細胞移植手術を実施。三年前から心臓への応用を研究してきた。人間に近いサルで実験し、より純度の高い細胞を分離できる装置を導入して安全性を確認。昨年二月に同大医学部医倫理委員会の承認を得た。池田教授は「副作用の危険性が高い心臓で、これだけ安全性を高めて細胞移植手術ができたこと